

第14回
建築コンクール

公益社団法人
愛知建築士会名古屋北支部主催

つぐ建築

CONTENT

SYMPOSIUM

松山 将勝 [建築家]	04
ナガオカケンメイ [デザイン活動家]	06
栗生 はるか [建築家]	08

CONCOURS

最優秀賞	10.11
優秀賞	11
審査員賞	12
佳作	13
応募作品リスト、一次投票、二次投票	14
審査	15
来場していた受賞者から一言、総評	16
協賛企業挨拶、愛知建築士会会長挨拶	17
コンクルのあゆみ	18
後援 協賛企業	20





松山将勝 建築家

株式会社松山建築設計室 代表

九州・福岡を拠点に全国各地で様々な設計活動を行っている。

代表作品である故郷奄美大島で手掛けた「父母の家」は、南の島特有の気候風土から着想された建築手法が国内外で高く評価され、日事連建築賞日事連会長賞、日本空間デザイン賞、住空間部門金賞を受賞。2019年には「大屋根の棲家」で日本建築学会作品選奨。日本建築学会建築九州賞においては、過去最多となる7度の作品賞を誇る九州を代表する建築家。

<https://www.matsuyama-a.co.jp/>

1. 心の闇をつぐ



栃木県生まれの田中一村は7歳の時に水墨画で天皇賞を受賞し注目を集め、画家の道を歩み東京芸術大学に進みます。ところが2ヶ月で退学し、自分が描くものが評価されず絶望感を覚え、距離を置くことになります。その後、自分を取り戻そうと旅に出て、最終的に奄美大島へたどり着き、69歳で亡くなった後に評価されます。私は一村の代表作である『奄美の森』に小学生の時に出会い、大変な衝撃を受けました。奄美大島は水平線に広がる心地よい、開かれた風景がイメージされると思うのですが、そういったことを一切描かない。森の内側から向こう側の海を少し覗くぐらいの世界が心の闇を示しているのではと思うのです。

2. 何が私とつながり、 どういった空間を作るのか

左下は私が生まれ少年時代にいた場所です。幼少の頃は言語障害を抱え、人と触れ合うことを怖がる時代を過ごしました。向こう側の気持ちの良い空間よりは、こちら側の暗く距離を置いた世界にいる方が心地よかったのです。

上段中央写真の住宅は、川があり開かれた場所に面していま



す。川の風景と共に暮らすというオーダーでしたが、中庭を設けて向こう側の風景と距離を置きました。開かれた空間と一定の距離を置く空間が私にとって心地よい設計になりました。

右上の住宅は、開口部の高さを絞って絞っています。開いてほしいという施主の希望と、閉じたいという私のせめぎ合いの空間です。振り返ると、幼少期の原風景が設計に宿ってしまうとわかってきました。

右下とその上は、奄美大島の建築で自分を変えていこうと試みたのです。海があり心地よい空間で視覚的には開いているが、潮の香りもしないし潮の音さえも聞こえない、嗅覚も聴覚も閉じているということです。開口部で海と一体となった空間にしたいというオーダーでしたが完全にフィックスでクローズしました。開いても閉じてしまうということが自分の建築家としてのスタンスなのかと思っています。

3. 原風景をつぐ、技術をつぐ

奄美大島の両親の家と、ガジュマルの木です。かつてはこの下で島の人たちが集い、酒盛りや食事をしていました。暑いため木陰にすることが島の人たちの暮らしでした。この暮らしを建築の形式としてつげないかと思い、木から着想をもらいました。大きく屋根をかけ室内は暗く影を落とし込み、手前が暗



く向こうが明るいという、自分の建築家としての正体は、そういった距離を置きたいという思考に基づいていると思いました。

私が奄美大島で設計活動をして15年になります。15年前友人邸の設計にて、職人たちと意志が通わず、自分が抱く建築が作れないまま完成しました。島では二度と設計しないと決めましたが、私が島に貢献できるとしたら、技術的なものを少しずつ上げられることではと改め、10棟目にできたのが「父母の家」です。この時には、職人たちとの関係性もでき、職人たちにも自信ができました。12年を経て技術を育み未来をつないでいくことが建築家としての使命ではないかと思いました。

4. みんなの診療所



私自身も職人たちにも自信がつき、今は職人たちの方からもっと難しいものをという関係性ができています。これはスケルトンで、鉄を組みそれが少しでも狂うとガラスも木造の加工も仕口も収まらず、全ての精度がなければ成り立たないものを描きました。これができたら奄美大島という資源や人が少ない中で未来につないでいけるのではないのでしょうか。

5. 棟上げ



私が故郷の奄美大島で建築を作りはじめ、15年間かけて「みんなの診療所」が完成します。棟上げで全てが決まるという喜びとして記念写真を撮りました。関係性を築くのに15年かかりましたが、島の人たちの手によって究極の建築ができるようになったということで、技術を育みそれをまた未来へつないでいく事例となりました。



※シンポジウムを要約した内容です。
全編は愛知建築士会 名古屋北支部公式 Youtube チャンネル【しづちゃん】をご覧ください。

<https://www.youtube.com/@user-pp9go5gt6u>



ナガオカケンメイ デザイン活動家・D&DEPARTMENT ディレクター

「ロングライフデザイン」をテーマにストアスタイルの活動体D&DEPARTMENT PROJECTを創設。47都道府県に1か所ずつ拠点をつくりながら、デザイン目線の旅行文化誌『d design travel』や日本初のデザイン物産ミュージアム「d47 MUSEUM」などを展開。物販・飲食・出版・観光などを通して、47の「個性」と「息の長い、その土地らしいデザイン」を見直し、全国に向けて紹介する活動を行う。2013 毎日デザイン賞受賞。

www.nagaokakenmei.com

僕は建築家ではないので自分のやっていることをテーマ「つぐ建築」に重ねながら考えたことを話します。

1. 美の基準



神奈川県真鶴町で50年程前にできたまちづくり条例「美の基準」では、自分の町らしい風景に独特なキーワードをつけています。この基準があることで、例えば「舞い降りる屋根」を我が家にも採用しようという感じになります。

今僕がいる愛知県知多郡阿久比町という小さな町には機屋のノコギリ屋根の建物が多く残っていて町の風景になっていますが、それが次々とアパートに変わっています。それは良くないと思い阿久比らしい風景をつくっていくためにはと調べた結果、美の基準に巡り会いました。

僕が阿久比らしいと思う所の写真を撮り、町の人たちに名前を付けてもらって展示会をしました。それを1冊にまとめて「阿久比の美の基準」をつくっていきこうと考えています。その町の風景を継ぐために、一つの建築として考えるのではなく、町全体のその土地らしさを皆で拾い上げて、それをもとに建築をつくることができるといいなと思っています。

2. 変えずに変える

「養命酒」のデザインです。40年以上変えなかったものを変えずに変えてくださいという依頼をもらいリニューアルしました。ロゴを新しく大胆に変えてしまうのではなく、変わってないような状態で微細な古臭さを排除して整えることで、ブランドを継ぐと

いうことをしています。色についても新しい赤色を作るのに3ヶ月くらい印刷所に通い、試し刷りを繰り返して、古臭くなった朱色っぽい赤を今から40年くらい使える赤に変えました。継ぐ方法として新しく大胆に変えるのではなく、今まであるものからどうやって古臭さを取り除き、新しい時代に放つかという話です。



3. その土地をつぐ

d デザイントラベルという、その土地の長く続いているもの、その土地らしいものを紹介するガイドブックをつくっています。取材対象を選定する際に、その土地らしさとは何か?を考えます。地域の人に集まってもらい、例えば愛知県らしい喫茶店はどこだろうと議論しますが、これが盛り上がります。なぜならば自分たちの土地らしい喫茶店だなんて考えて行っておらず、そうか! あそこは自分たちの土地らしい場所なんだと気づきかけになるからです。



沖縄号をつくっていた時に自分達のカフェをつくらうとしている方がいて、このワークショップを1回経て自分達がつくらうとしているカ

フェが都会にあるようなカフェだったことに気づいて白紙に戻して、沖縄らしいカフェをオープンされたという例があります。何かをつくる時に参考にして、その土地の長く続いているものをつぐための「その土地らしさ」を紹介する情報誌、観光ガイドです。

4. 根っこをつぐ

60（ロクマル）ビジョンという活動をやっています。

1960年はデザインを頑張っていた時代で、多くのデザイン企業が誕生しました。創業時の原点の商品があり、そのブランドの後ろに「60」という記号をつけて、ブランドを整理する



ためのブランディングブランドと位置づけて販売することで、自分たちのブランドを伝え、継いでいく活動です。一番ヒットしているのはカリモク60のソファ。

廃盤商品を復刻して定番のロングライフ商品になっています。ブランドを継ぐ方法として新しいコンセプトを立てて何かをするのではなく、元々あった大木に接ぎ木をするような感じで新しいものをつくるということです。

この椅子は1964年につくられたもので、その椅子に座りながら今の生活に合うテーブルをカリモク社内のデザイナーにつくってもらいました。企業も個人も何でもそうですが、こういう進化の仕方が自分たちらしさをつぐことにつながると思います。根っこのあること、ものを探し、そこを基礎に未来へつぐ、ということです。



ルーブル美術館ではガラスのピラミッド型の出入口をつくることによって入場者が2倍から3倍に増えたそうです。ルーブルとしては入場者が少なくなってきた、何とかしなくて

はということで考えられたと思いますが、こういう発想でその建築やルーブルの歴史を継ぐということがとても好きな例です。

5. まわりとつぐ

Gマークのロングライフデザインの展示に関わっています。私たちD&DEPARTMENTはただ商品売るのではなく、商品のまわりにあるもの、例えば鉄の薬缶だったら材料がどこ

から来るか、それを使った生活がどうなるか等を意識しています。昔は柳宗理の薬缶ということだけで売れたが、今はその薬缶を手に入れるとどう生活が成し得て、その原材料をつくっている環境がどうなっているのかといったことも含めて薬缶を手に入れる時代です。ロングライフデザイン賞を受賞した一つ一つのメーカーのものやことに対して、地域、仲間、環境、産業、暮らしなどが「もの」のまわりにはあるという自分たちの販売のルールを当てはめて展示しました。そのものだけを考えず、そのもののまわりも考えないと続かないと思っています。

これは石垣島の石積み塀です。都会ではこういう風景に憧れるとお金とエネルギーを使って石を輸送してこの風景をつくってしまいそうなことです。ですが石垣島では、道路を整備している間に石がたくさん出てきてしまうから横に積

んでしまえ、といったことで風景が生まれていく。デザインということではなくて、その土地の生態系の中でいろんなものをさわっているうちに出てくるものが風景になっていくということが、その土地らしさ、風景を継ぐということになるのではないかと、こういうアイデアがあったらいいなと思います。



早稲田大学で建築を学び、ヴェネツィアへ留学。(株)NHK アートを経て、大学で建築教育に携わる。
法政大学 江戸東京センター客員研究員として、都市空間とコミュニティについて研究。現在、法政大学、慶應大学非常勤講師。地域の魅力を様々な角度から発信すると共に、銭湯と周辺地域の再生活動を展開している。東京文化資源会議や東京ビエンナーレ 2020 に、本郷エリアのディレクターとして参画。空家を活用した地域サロン等も運営中。

まちつぎ：
まちを継ぐ、まちを接ぐ、まちの次を考える



まちの記憶を “つぐ建築”

地域の銭湯が消えていく状況に向き合い、記録や記憶だけではその空間の持っていた価値を伝えきれない中、解体時の物品で「銭湯山車」を作り街中を引き回すお祭りをしました。これを巡行させると一瞬だけでも銭湯のありし日のコミュニティが再生されるような事態が起こります。お祭りというものの自体が、忘れてはいけない記憶を忘れないようにつなげていく行為で、「つぐ建築」と言えるのではないかと。

銭湯を建物とし
ては残せなかつ
たものの、せめ
てそこにあった
コミュニティを継
げないかという
思いで、築100
年程の長屋（ア
イソメ）や廃
業した印刷工場の空き倉庫（白山倉庫）を地域サロンとして
運用している様子です。銭湯が消えることで地域の人たちが
顔を合わせる場所がなくならないよう自由に利用できる場所を
New 井戸端と名付け、空き家や再開発前のビルの一部など
を活用し、かつてのつながりで新しい場所を作る現象が起きて
います。建築が継がれていなくても、都市の隙間に人とのつ
ながりがしぶとく移動しながら継がれていくという、これも「つ
ぐ建築」と言ってもいいかなと。



東京都北区にある稲荷湯という
現役の銭湯で、
継 続 が 大 変 な
銭湯を今後につ
なげるようサポ
ートするプロジェ
クトです。単体
で残しても輝か
しい未来が待て
ない銭湯が周辺
のまちと共に存
在し、銭湯がな
くなくなると店
店も一緒に消え
、まちが一つな
くなるくらい



影響があります。逆にまちが変わってしまうと銭湯のお客さんが減ることで維持ができなくなり、一体として存在することで生態系が保たれると感じます。稲荷湯の隣にある古い長屋二軒を銭湯の湯上がり処に改修することで地域の人たちが使えるようにしました。銭湯は昔ながらのコミュニティの場所で引越してきた人や若い人たちが入りづらいため、銭湯に入らなくても既存のコミュニティとつながれるような建築になっていると思います。長屋自体が壁一枚でお隣さんと繋がっている、構造自



残っている長屋は時代に合わせて住み手が好きなように改修を加え、縦に積んだり横にはみ出たりして増殖し、接がれている長屋は「つぐ建築」にぴったりだなと思います。

昭和9年に東京都港区白金台に建てられた渡辺甚吉邸（岐阜の名家・渡辺家の14代当主、甚吉の自邸）が解体されることになりました。保存活動をするために解体を延期してもらい、同時に活用主を探していたところ、前田建設工業さんが全て部材解体をして自社の敷地（茨城県取手市）に保存をしてくれることになり、2022年4月に再生した事例です。解体する過程でかつての職人さんの工夫や技術力が見えてきて、常滑の職人さんにタイルを再生してもらうなどかつての職人技を継ぐという努力をしつつ、最先端のデジタル技術でかつてのディテールを再現するという、古い技術と新しい技術が非常に高度なレベルで継がれた一つの事例として紹介しました。



イタリアのベネチアを上から見た図です。建物が何百年も建っている状態で、東京のようにすぐ更新してしまうのとは真逆で全く更新されない状態が続いています。黒い部分が建物で白い部分が広場や道ですが、その白い部分に赤い点がプロットされているのがベネチアで1年間に出てくる仮設物です。建物や街並みが全く変わらない中で都市がどのように更新されていくのかを、外部空間に仮設物を出しいろいろな形で演出することで今の生活にフィットさせています。例えば日本なら大型マーケットが必要になると古い建物を壊して大きく作りますが、ここは広場に折りたたみ式の屋台を出し、大市場が朝に出て昼になるといなくなる形で、仮設物が古い街並みを補完して維持しているような状態が起きています。過去の古い街並みや建築を継ぐ小さな仮設物が「つぐ建築」と言えるかな。

ふるまいによって“つながれている建築”

ナポリです。下にいる人がバケツに新聞やタバコ、日用品を入れると上にいる人が買い、そのバケツ



の中にお金を入れてやり取りをします。振る舞いによって寄り添うことでコミュニケーションが生まれ、人とのつながりも維持されるところが非常に面白いのです。今まで継ぐということ自体はとても大変なこととして取り上げていましたが、彼らは日常でそれを行ない、既に楽しんでいるという状況があります。わざわざ取り上げるべきものではなく、人間は何かを継ぐ、つなげたりくつついたりすることが本来のあり方ではないかと思わせるような場面です。



最優秀賞 「椎葉邸」

萬代基介



丁寧に刈り揃えられた生垣、歴史を感じる門構えと庭の松の木、その上に頭を出す瓦屋根。この場所に古くから見られてきた風景を、そのまま受け継いでゆきたい。ここ、京都市内の住宅地では、そう考える人は尚更に多いでしょう。一方で、家族構成が変わり、生活様式が変わり、あるいは老朽化や耐震性への不安を抱えるとなると、「建て替え」が現実解になることもあります。

この「椎葉邸」の内部の写真をみると、築100年ほどと言われて意外に思えるほど、変化に富んだ広い空間があります。母屋を中心に下屋が幾重にも付け足されてきたこの家の形式を踏まえ、新たに加えた下屋を母屋を横から支えるための構造補強として扱うことで、母屋の周囲の壁を抜き取ることを可能とし、この広い空間を生み出したのです。

設計者、萬代基介さんはこう書きました。

「町の記憶や風景を残すことと新しい生活を作ること、両方を試みた型としての改修である」

この住宅によって見出された「型」が、ほかの家々に広がり、街並みと人々の暮らしを守り続けることを願っています。

最優秀賞 「樹齢 670 年 巨樹の保存活用」

ナノメートルアーキテクチャー 野中あつみ+三谷裕樹



豪雨災害によって根元から倒れた樹齢670年の御神木・大杉の保存活用プロジェクト。建築コンクールは「建築の定義を広げる」というテーマを掲げて毎年コンクールを実施してきた。その最優秀賞を決定する過程で「これは“建築”だろうか」という問いが審査員から出た。扉も無く、内部空間も無く、中に入って雨をしのぐこともできない。かろうじてコールテン鋼の屋根がある。むしろ傘に近い。

『これまで町を見守ってきた大杉を、これからは住民が守り続けていく』

「大杉に対峙すると自然と何かできることがないかを考え、人と人の繋がりや支え合いが生まれていきました。大杉を取り巻くたくさんの動きこそ、私たちが未来に繋げていかなくてはならない大杉のアイデンティティと捉え、「形」だけではない保存活用工事を行うことを、町民とのディスカッションを重ねて周知していきました。」(建築家HPより)

これは巨樹がこの場所に存在していたことを伝え、ゆっくりと劣化（変化）していく大杉と共に生を重ね、“保存”の概念を再定義し、朽ちていく巨樹を住民が守り続けていくという意思を告げている。

町と人々と大杉を観察し、災害による突然の別れから、ゆるやかなさよならへ巨木と町の人々との関係性を再構築した建築である。

優秀賞 「学びの器」

愛知シュタイナー学園 3,4 年生と関係者の皆様、中村武司、丹羽広大、松木直人

この建築は愛知シュタイナーの3,4年生と関係者の皆さんが「家づくり」の授業において建築しました。

いつの間にか建築は知らない誰かがつくるものになっていなかったか…。木のにおい、竹のしなやかさ、石の重さ、練った土の感触。自分が手を加えたものが置かれ、立ち上がり、架かり、組まれ、塗られ、留められ、大地と自分の間に小さな建築が生まれる。

大地、技術、他者に触れる。この行為は自分をつぎ込む行為である。そして建築が生まれる。

建築は自分の手でできる言葉やイメージで絵は出来上がったとしても、自分がつぎ込まれた建築は自分ですくしかない。

そんな学びの器を大人は羨ましく感じる。そんな学びの器を大人は羨ましく感じる。





松山賞

ハレの櫓 - 集う仮設舞台装飾的建築 -

白石雄也

町々から人々が、神輿を担いで山車を曳いて寄り集まり、中心には囃子の声とともにハレの場が現れる。祭りの風景は、私たちの心を躍らせます。

新居浜太鼓祭り、絢爛な飾りを施した太鼓台が集まる、賑やかな祭りです。

太鼓台とともに、街に点在する様々な居場所が引き寄せられて……そこには祭りのための建築、「ハレの櫓」が現れます。

この新居浜の街には、別子銅山を母体とした工業の町と、港町や農業の町が隣り合っています。

中心市街地・海岸・農地・産業遺産・繁華街・工場……普段はそれぞれの町でカフェ・食堂・ギャラリーなどとして使われる櫓を「仮設舞台装置」として、祭りの日には市街地に聳える大きな櫓の周りへ寄せ集めるといふ、姿の変わる建築を提案しています。

お祭りの原風景を未来につぐために、「圧倒的な力を持つ建築」を試みた作品です。その「あふれたこの場所の記憶」をつく建築として建ち現れました。



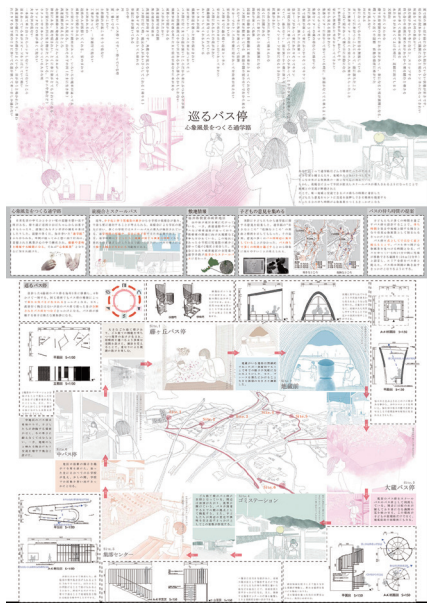
佳作



Edible Joinery / 食べる継ぎ手 国際建築ワークショップ

The Red Dot School / Nao Kono + Bryan Ortega Welch

「これが建築なのか？」と議論の俎上に乗った国際ワークショップ。伝統技術を継承しながらも軽やかにその入り口のバリアを取り扱う非常に印象的な取り組みでした。継ぎ手を食べ物で作って終わったら食べてしまう。昔、辞書を食べたというのは聞いたことがありますが、継ぎ手を食べた人は今までいなかったのでは？と思って審査を見ていました。技術は食べて覚える時代の到来かもしれません。

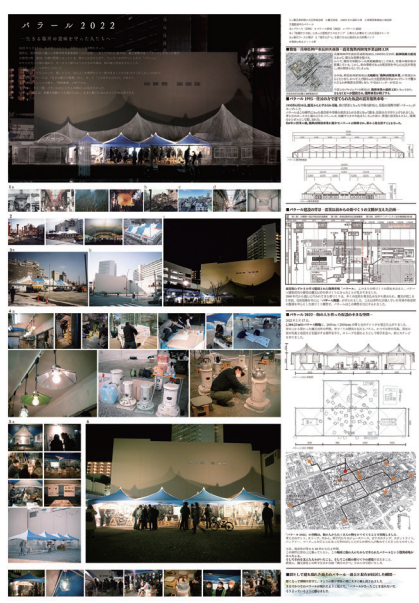


ナガオカ賞

巡るバス停

今野隆哉

小さい頃のまちの記憶。子供たちへの緻密なリサーチにより統廃合による課題を抽出。統廃合によりスクールバスが導入された子供たちの通学は「家→バス停→学校」となり、子供達が地域と接する機会であった通学路が失われました。6種類のバス停を6年をかけて6カ所巡らせることで、季節感を生み出し、単調になりがちな風景に変化を与え、「通学路」の代わりにバス停が新たな心象風景を作り出すという、巡回バスならぬ巡回バス停の提案です。



栗生賞

パラル 2022 - 生きる場所の意味を守った人たちへ -

柴垣志保

阪神淡路大震災のわずか5か月後、パラルのバザール「パラル」が誕生した。元をたどれば1960年代から行われていた住民を巻き込んだ街づくりに行きつく。震災5年前、老朽化が進んでいた市場や商店街の整備を中心とした「バザール構想」が住民組織を中心に作られていた。あれから27年、復興事業で無機質な商店街空間が再生され、まもなくその事業が終了する。

小さな仮設空間パラル2022は、最後に残った復興事業地に、「慰霊という形式」ではなく、パラルの形からイメージさせる影や記憶、復興の過程で生まれた空気感という「生きる歓びにあふれたこの場所の記憶」をつく建築として建ち現れました。



上住地区公民館

柿本佑介+廣岡周平 / PERSIMMON HILLS architects

山並みを望む広場、その脇に佇む、時計を中央に据えた建築物。山が見えない街中に育っていたとしても、この風景を見ると「小学校だ」と懐かしくなるのは、近代日本の原風景のひとつだからでしょう。

かつて校舎だった民俗資料館へ自然と視線が向くのは、同じ敷地にある「上住地区公民館」の屋根が、集中線的な効果を生んでいるから。

と、プレゼンを読み込んでみて気づきます。

ここは岩手県気仙郡住田町。古くから名高い気仙大工が、その技術と地元の材料を活かして木造校舎を建て、ここに文化的風景を残しました。新しい公民館も、地元の木材を現代の大工と地元プレカット工場の技術で組み合わせ、大きな空間を作っています。

大きな空間を作りながらも、木造校舎に向かって高さを抑え、控えめな存在であること。「文化的風景をつぐ」というコンセプトが明快に伝わる建築作品です。



床と大地の余地

FUMI EGAMI ARCHITECTS / 江上史恭

これは一体なんなんだ……と思わせる、目線の低い写真の数々。

家の作りやうは夏を旨とすへしと徒然草に語られるとおり、日本の住宅は夏の高温多湿に対応した高床が伝統です。しかしながら、普段の暮らしで床下をこのように見る機会は、そう多くはありません。

「床と大地の余地」に育つ生命を、私たちは見過ごすか、あるいは邪魔なものとして見てしまっていたのではないのでしょうか。太陽の光が届かないようにすることで、その大地が刻む時間を止めてまで……

この住宅には、5つの床がそれぞれ独立したベタ基礎の上に載り、さらにそれを繋ぐ床が高さを変えて連なっています。様々な角度から光と風の届く大地には、その微環境に応じた生態系が育まれる、その生き生きとした様子が、写真からも伝わってきます。

ここで人が暮らす床も、高さを変えた大地なのでしょう。今まで「床下」と呼んでいたところに繋がる大きな窓、そこから見える生命の姿は、ずっとこの場所に継がれてきた自然の営みを感じさせてくれます。

応募作品リスト

1. 若葉町 WHARF 銀行から劇場へ / 2. 椎葉邸 / 3. 西宮の邸宅 / 4. 別院町の集合住宅 / 5. ジオデシックドーム / 6. 四季とともにある家 一時をうけつぐ建築 / 7. Sumu Yakushima / 8. 一口坂中央ビル / 9. 木らり / 10. 心柱の家 / 11. 蔵の家 / 12. 高尾稲荷社 / 13. みえないプレイス / 14. WEST LIGHT / 15. 伊賀里山農園プロジェクト [ideca] / 16. ハウス LS / 17. 部戸を活用した防災拠点 / 18. 11-1 studio / 19. Door house - 緑の吹き抜け - / 20. みんなで継ぎ次ぎ / 21. 竹筥舎 -TAKENOYA- / 22. 一きつと着地できるー(子供シェルター) / 23. 骨と皮とプロポーションの家 / 24. nimbus / 25. 入母屋の離れ / 26. 樹齢 670 年 巨樹の保存活用 / 27. 茶山台団地のリノベーション / 28. 人と植物を活ける街のプランター / 29. おもちゃの戦略 / 30. 被膜の増築 / 31. KAKAMIGAHARA PARK BRIDGE / 32. 川と家 / 33. SLBH4 / 34. SLBH6 / 35. SLBH 1 / 36. 星乃珈琲店 守谷店 / 37. 7 部屋のコートハウス / 38. Pergola / 39. 中町フラット / 40. CloudEat Kitchens Marunouchi / 41. Y 邸 / 42. つなぐあかり / 43. 野性をつぐ / 44. まちなかのチャペル / 45. まちの技術家庭科室 SHIBATable / 46. 床と大地の余地 / 47. me-tablehythm / 48. 星野神社 覆殿・本殿(愛知県豊川市指定文化財) / 49. 不惑の一棟 / 50. SICK NESTLE / 51. つぐ建築 / 52. aloe / 53. お茶風呂 / 54. まちあい・待ち合い、マチと逢い、街と合う / 55. 空箱と仕切り / 56. O/4 / 57. 場所のリノベーション - 小さな活動から考える設計手法 - / 58. 成長する建築 / 59. 江田の家 / 60. Memories / 61. たべごと屋ゆかり / 62. おくりもの / 63. Edible Joinery / 食べる継ぎ手 国際建築ワークショップ / 64. 目白の間抜け / 65. 模様家具 / 66. WASTE PAVILION / 67. PPP 東村山市萩山町児童創造児童館 / 68. 屋根付き庭の家 / 69. やさしさを紡ぐ / 70. Family Tree / 71. 土づくりの家 しごとを受け継ぐ地域移住 / 72. Make a better place / 73. スキガラ邸 / 74. 連なる場 / 道 / 75. KOMAE わくわくストリートプロジェクト / 76. 平和に包まれたその中で / 77. 大黒柱のある家 / 78. 山車祭りが華やぐまで / 79. 人と歴史をつぐ建築 / 80. つぎたし、いとなみ / 81. KIYOSUMISHIRAKAWA ATELIER STREET / 82. 見え方の創造 / 83. ミセと学び / 84. かげの家 / 85. Paper Pavilion / 86. 遠くをつな

ぐ・築 40 年の空き家の再生 / 87. octagram / 88. 文化的風景を継ぐ / 89. 日本の文化を"継ぐ"建築 / 90. 紀伊田辺の家 / 91. 古い街並みを引き継ぐ / 92. What's WAlmto.!? パブリックアート ヒューマンスケール あなたとわたし / 会場構成 / 93. 大地を編む / 94. 廃墟的空間に住まう - リノベーションにより可能となる空間 - / 95. ハコビ / 96. "NEON" Hair Salon / 97. USB-G / 98. ナニワのウラ空間 / 99. 継ながれる伝統、つぐ木組 / 100. 鶯啼居 / 101. 前橋けやき並木再編プロジェクト / 102. THE WOOD / 103. 通り庭を持つ家 - 歴史をつぐ土間空間 - / 104. コンティニューハウス / 105. 地域交流拠点「審蔵とことん」 / 106. ハレの檜 - 集う仮設舞台装置の建築 - / 107. 祭から建築へ 新居浜太鼓祭りをメタファーとした建築設計手法 - / 108. YAGURA stage / 109. 炎の痛蓋 / 炎の琥珀 - 都市の中で新陳代謝する木の防火壁 - / 110. 40 Jahre Bauhäusle Pavilion / 111. 未来に引きつぐ小さなデザイン—地元企業のデザイン手法を通じて— / 112. しおまちの食卓 ~食と柄につぐ~ / 113. おいしいパーク / 114. つぎはぎのスタジオ 亀山の音楽スタジオ・ギャラリー / 115. Shibuya castle officebuilding / 116. 竹と過ぐす / 117. 積浦のオフィス / 118. 南伊豆町サバホテル計画 / 119. 市場小学校けやき分校 / 120. つぐ東屋 / 121. どんぐりの里いなぶ屋根付き広場 / 122. Skeleton / 123. 散策舎〜日々を確かに歩むための本屋〜 / 124. 嘉麻市庁舎 / 125. 豊橋の住宅 / 126. Memorial Workshop / 127. 店舗 T / 128. 錦二丁目のまちづくり拠点 / 喫茶七番 / 129. 波 / 130. ato/tugi / 131. HOUSE F / 132. エピソードをビジュアライズし、空間を媒体にして継承するリノベーション / 133. magnet / 134. いがす屋 / 135. 彩る交番 / 136. 巡るバス停 / 137. Pupal moments / 138. 古材の次の継ぎ / 139. 学びの器 / 140. 無作為な学び / 141. まちの秘密基地 / 142. 思い出をつなぐ / 143. 継承と承継の文化実験 / 144. 場の保存とイマージュ - 農地と建築の可能性と集落の終結あるいは再起 - / 145. 野点 nodate. / 146. らくがきでつながるキャンパスの居場所づくり / 147. Wind power next-generation / 148. ひとり親家庭の貧困問題に向き合います / 149. パラール 2022 - 生きる場所の意味を教えた人たちへ - / 150. 流水の土間 ※作品番号と作品名は応募時点の内容で記載しております。

一次投票（一人 10 ポイントの投票）→ 150 作品から 25 作品へ

2 ポイント (5 作品)

2/ 風景を残しながら、全く別の世界に切り替わっていている。
18/ ものづくりの楽しさを、街全体で共有する。
自分がプレゼンしてんじゃないかって思うくらい、なんか言語がkabuつていて。
26/ 地域の人たちも巻き込んで、お祭りみたいにそこてつながりができるっていうのが、まず面白い。
理屈として説明できないようなことが、これからとっても大切になっていく中で、多くの人が共有して思うってこと自体が素晴らしい。
45/ 自然体で作ってるって感じがした。
63/ 幅広い人たちがその自分たちのルーツである文化伝統技術を知ることができるところに可能性を感じています。
パツと楽しそうなので、やっているうちに建築の話なだっている風になっていく。

1 ポイント (20 作品)

11/ 空間形式と、その構造形式の一致
12/ こういうの大好きで。粋。
16/ 壇上の空間が、生活のシーンも豊かに。

27/ 主張してない操作で、心地よさが感じられる空間。
29/ 個人個人の思い出をも含みながら。
38/ この農地にあるような言語を使って作って、新しく馴染んでいながら、心地よい空間になっている。
44/ 街の隙間みたいなところがいろんな可能性を感じた。
46/ 実践でやるかということの面白さ。
48/ 現代的な設計手法と、伝統工法をミックスさせる新しい世界。
54/ 隙間が継いでいく感じがすごい好き。
56/ 元々前にあった人々を尊重した結果ある形が生まれてきた。
78/ すごいプロセスが丁寧。
81/ やってみようって言われた時に、いろんなことが試されるというか、実力が出てくる。
88/ 地域とつないでいるって設計プロセスが素晴らしい。
105/ 単純に可愛い。
106/ 自分の原風景を未来へつなげてつないでいきたいという思い。
124/ 環境へのアプローチが今すごく大事なところ。
136/ きっかけを作る仕掛けとしては、すごいいい。
139/ 子供でもできるんだっていうのにびっくり。
149/ 復興の過程で生まれた空気感。

※審査コメントからの抜粋です。

二次投票（一人 5 ポイントの再投票）→ 25 作品から 11 作品へ

3 ポイント (1 作品)

139. 学びの器

2 ポイント (2 作品)

2. 椎葉邸
26. 樹齢 670 年 巨樹の保存活用

1 ポイント (8 作品)

12. 高尾稲荷社
29. おもちゃの戦略
46. 床と大地の余地
63. Edible Joinery / 食べる継ぎ手 国際建築ワークショップ
88. 文化的風景を継ぐ
124. 嘉麻市庁舎
136. 巡るバス停
149. パラール 2022 - 生きる場所の意味を教えた人たちへ

審査

浅井さん（以下浅井） 3 票入ってるのが、学びの器。2 票が、椎葉邸と、巨樹の保存活用です。この 3 つが大賞と、優秀賞の候補でいいと思うんですけど、3 票入ったのを大賞としてよろしいでしょうか？

松山さん（以下松山） 順位があって、僕的にはやっぱり椎葉邸か、670 年かなと思います。

浅井 ということだと決まらないので。

松山 学びの器はどうなんですか、最優秀賞に推したい人います？

浅井 今、2 ポイントまで入っているところで椎葉邸はケンメイさんは入れてないで、670 年は松山さん入れてないです。

松山 入れると椎葉邸に決まらなと思ったので。

浅井 栗生さん、どうですか？

栗生さん（以下栗生） 私は 670 年ですね。椎葉邸も好きなんですけど、まあ去年の銭湯山車にしろ、今までいろいろ作品出させていただいて、ほとんど建築とは思えないものを貰っていたいて、本当に建築の定義を広げるって意味で、逆にこういうものを拾えるコンクールって他にあるのかなっていうのもあるんですよね。なんかここだとそういうものも評価してくれるという安心感が。

浅井 (栗生さんは) 本当に長いことお付き合いいただいているんで、よくわかっていただいて。なるほどありがとうございます。

栗生 今私が板挟みで。

浅井 もう (票が) 割れまくってますから。ケンメイさん、どれを大賞にしたいですか？

ナガオカさん（以下ナガオカ） 僕は椎葉邸を選ばない。理由は、僕が建築家じゃないからです。僕は建築家だったら、すごいおっしゃることは本当にわかるし、自分が選んでなかったシートですけど、改めて見てもとってもよくできているというのはわかるんですけど、これは僕が選ぶものではないので。これをこのコンテストで選んじゃうと、こういう方向性のものにばかりいってしまう、いわゆる建築家の人たちが集まった、よくできた建築コンペになってしまう可能性を考えると、僕みたいな審査員が呼ばれなくなってしまふ。呼ばれなくてもいいんですけど。なんかそういう意味では、自分がここにいる理由としては、なかなか選びたいけど、選びにくい。

浅井 ケンメイさんはこれが最優秀だというのはありますか？

ナガオカ 最優秀がないんじゃないかって思ってきました。

浅井 今回は最優秀に値しないぞと。

松山 これ言うと多分結論が出ない形になってしまうんですが、もちろんこのコンクールの楽しさって建築以外のものが選ばれてしまうという、他と違う物ってあるかもしれませんが、でもやっぱり建築への信頼みたいなもの、建築の凄みを持ってる建築は、ちゃんと賞を与えてあげないと、そこに寄ってしまう感じが僕はちょっと懸念しててね。

例えば、670 年は建築として、なんとか僕も飲み込んだとしても、お菓子まで評価するような状況では、ちょっと行き過ぎかなってね。そのボーダーラインというか。



ケンメイさんは無しということでしたが、椎葉邸か 670 年かどれかで、3 人ですから、もう多数決で決めるというのはどうですか？

浅井 そうすると、無しか、椎葉邸か、670 年かっていう話。では、大賞がない理由をちょっとだけ説明してもらえると。

ナガオカ このコンペのこの審査員の顔ぶれを見ていただくと、僕も客観的に見てわかるんですけど、新しい建築の振れ幅を広げるといようなことがあるので、そう考えていくと樹齢 670 年を建築と呼ぶか、呼ばないかっていう、その松山さんの議論はすごいよわかる。そう考えると、これはグランプリではないのかな、とも思うんですよ。そうなった時に、僕は該当なしっていうのは、すごく賢明なアイデアとは思わないですけど、そこにはまるものをみんなで想像するっていう会もあってもいいのかなっていう、ちょっと乱暴ですけど。

浅井 栗生さんは、このコンテストに出す側で長い付き合いしてるじゃないですか。その辺で何か、いやいや違うとかありますか？

栗生 出す側としては、唯一気になるのは賞金はどうなるか。

浅井 栗生さん、今までずっと応募してきて、お金の話は置いておいて、最優秀賞ないよねっていうのはどうですか？

栗生 この議論の末、670 年みたいな建築と今まで言えなかったかもしれないものが選ばれるっていう事の価値と、あと松山さんがおっしゃってたようなその建築たるものを守っていくっていうのが、両方理解できるし、このコンペは両方受け入れるというか、担保して、このコンクールはそういうものを両方とも見ますよっていう姿勢を見せるのであれば、そういう理由で私は最優秀賞なしで、優秀賞 2 つ、もしくは、最優秀賞 2 つ。

松山 例えば、最優秀賞 2 点にして、10 万づつはどうですか。

ナガオカ それは、僕もいいと思います。

松山 2 つにして 10 万ずつという変更はできない？

浅井 でも、ケンメイさん最優秀賞にあげてもいいの？

ナガオカ 終わらないじゃないですか。

松山 最優秀賞 2 点でいいんじゃないですか。優秀賞を、1 点にすれば。

浅井 今、得票ポイントで 2 ポイント以上取ってる 3 つの中から、2 つ選ぶということですね。次は 2 回手上げてくださいね。

椎葉邸 3P / 670 年 3P

浅井 最優秀賞を 2 つにしたので、優秀賞が 1 つ。優秀賞は学びの器で大丈夫でしょうか？

松山 異論無いです。

浅井 いいですか皆さん、みんな頑固だからはっきり言っておいてください。はい、じゃあ学びの器が優秀賞です。

※審査を要約した内容です。

来場していた受賞者から一言

149. パーラー 2022 (柴垣 志保さん)

柴垣さん これは学部4年の卒業設計として提出したもので、去年地域の方々の協力を得てやったプロジェクトです。今日はこういう風に評価していただけて、またもう一度協力してもらった町の人にも伝えたいなと思ったし、本当にありがとうございました。

139. 学びの器 (松木 直人さん)

松木さん 大工をやってまして、設計と施工両方やったっていう形で選んでいただいて、ありがとうございます。

懇親会にも参加するので、後々、色々喋らせていただきたいと思います。

浅井 何で最優秀じゃないんだとか？

総評

松山将勝さん

お疲れ様でした。

さっきケンメイさんがおっしゃったことがすごく響いてて。

何かっていうと、こういった建築コンクールの審査員が建築家だけであるってことが、いかに選択肢というか、可能性って言いますかそういったものを妨げてしまうっていう恐れもあるということ、今日の審査委員をさせていただいて、そう感じましたし、今日の3人は少し軸足も違ったりとかして、視点も違ったりとかして、すごく楽しかったです。だからこういったコンクールの特性って言いますか、なかなかと思うんですね。

これ建築なのかって議論も普通ないわけですよ。

だからそういう面でも、とてもバラエティに富んでいて、このコンクールの意義っていうか、そういったことが、応募作品からも分かりましたし、改めて審査の責任っていうか、すごく重いということを改めて感じましたし、今日はすごく楽しい議論ができて良かったです。

ありがとうございました。

栗生はるかさん

酸欠のような感じで、クラクラしてますけども。

楽しいというか、楽しいだけじゃなくて意義ある審査になったんじゃないかと思っています。

松山さんとナガオカさんが一切採点



松木さん すごい納得いく結果です。他の2つ本当にすごいと思いました。

古材の話は、右下にあるのは遊郭のもんなんですけど、稲本にある遊郭の門の古材をバラしたやつ。まあ再建もこないでしたんですけど、その古材を入れて。

浅井 何であそこに古材が入っているのか、気になっていた。

松木さん 結構、物的にもストレートに接いでいるっていうのもありつつ、無形なもの、技術とかそういう意志をどう継げるかっていうことを考えてプランニングと、どういうアクティビティが生まれるかっていうことを考えてやりました。

(投票) がかぶらないっていう中で、その間をつなぐ役割を全うできたかなと、建築家と活動家で悩んでる私ですけど、ちょうどその中間を。(笑)

自己分析にもなりました。ありがとうございました。

ナガオカケンメイさん

いや本当にはるかさんのコメント通りで。

僕は松山さんの、やっぱりプロの建築家っていうのはこんなにすごいんだって思いましたし、改めてプランを見ると本当に皆さんよくできていて、とは言ってもやっぱり自分が参加してる意味もありますし、浅井先生に誘われてこの審査員に参加する時は、やっぱりその審査員がどういう人かっていうことと、このコンペがどういう風に可能性のあるかっていうところを見て加わってるので、本当にいい結果になったような気がします。

去年も含めて、本当に素敵なコンペになっていくんじゃないかなと思います。

どうもありがとうございました。

浅井さん

ありがとうございました

史上最大の応募数 + 史上最大の頑固な審査員ということで、非常に面白い議論ができたと思います。今日は皆さんありがとうございました。



協賛企業挨拶 旭化成建材株式会社 中川支店長

今年も愛知建築士会名古屋北支部様主催の建築コンクールが無事開催されましたことと、史上最大の応募数ということと、史上最高に白熱した議論ということですね。本当に心よりお喜び申し上げます。私自身も(公開審査会場に)参加させていただいて、大変楽しく先生方の解説をお聞きして、こういうことなんだというふうに思いましたし、白熱の議論ですね、最後は最優秀賞が2つになって、もう一口というふうに言われるのではないかと、手に汗をかいてしまいましたけども、無事に終了してほっとしております。(笑) 今日、各賞受賞された皆様、本当におめでとございます。来年もまた、無事に開催されますことをお祈りしております。今日はどうもありがとうございました。



愛知建築士会会長挨拶 濱田会長

今日ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。また松山先生、栗生先生、ナガオカ先生、また浅井さんも、北支部の皆さんも、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。楽しく議論を拝聴させていただきました。

つく建築っていうテーマで、『つく』って自分にとってなんだろうなってふと思った時に、自分は建築設計を業としているんですけども、僕三代目なんです。そういえばこれも継ぐだとか、そういうのも思ったり。先ほど、会長というのがあったんですけど、実は僕は17代目なんです。愛知建築士会の会長、これも継ぐじゃんとか。

色々時代が流れていって、未来に流れていく。そんなようなことも継ぐということになるんだろうなというふうに思うと同時に、他に継ぐってなんだろうなって思った時に、価値があることとか、そういうことなのかどうか思ったりもしました。

価値ってどういうものが継がれていくのかっていうと、もしかしたら愛されていくものなのかなっていうこと。人から愛してもらえるようなことが、継がれていくのかもしれないというふうにも思っています。

僕は建築士会の会長をやっているものから、僕らも未来の子供たちとか、今日、学生の皆さんがいっぱやってますけれども、そういう方達に継ぐってというような立場の中でやっていかなきゃいけないっていうのを気づかされた、そのようなことを感想で思いました。

これからも継ぐ建築コンクールでいていただければというふうに思いました。ありがとうございました。





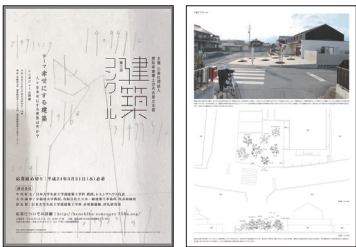
第 1 回「小さな建築」 2010.04.24

記念すべき第1回。
中村好文氏、古谷誠章氏、伊礼智氏を迎え、今池ガ
スホールにて開催。
予想を上回る148 作品が集まり、初めてのコンペ企
画にあって公開審査会を開催する大変を実感。



第 2 回「これも建築？」 2011.04.16

会場を東桜会館に移して開催。審査員は、中村好文
氏、古谷誠章氏、伊礼智氏。
65 作品



第 3 回「幸せにする建築」 2012.04.21

会場は東桜会館。
審査員は、中村好文氏、古谷誠章氏、伊礼智氏。
早稲田大学にてテーマシンポジウムを初開催。建築コ
ンクールは「シンポジウム」と「公開審査会」の二本
立てとなる。
審査会当日は愛知建築士会佐藤会長(当時)にも有
志参加していただき激励していただいた。同時に我々
の活動が広く認知され始めたと感じた。
67 作品



第 4 回「おいしい建築」 2013.05.18

会場は東桜会館。
審査員は、中村好文氏、古谷誠章氏、伊礼智氏。
前回同様、早稲田大学での「シンポジウム」と東桜会
館での「公開審査会」という内容。
3 人の審査員の息のあった掛け合いトークが建築コ
ンクールの面白みを増すこととなった。
67 作品



第 5 回「翔んでる建築」 2014.01.25

会場は東桜会館。
審査員は、中村好文氏、古谷誠章氏、伊礼智氏。
早稲田大学での「シンポジウム」と東桜会館での「公
開審査会」という内容。
春開催から年明け開催に大きく舵を切った。
62 作品 67 作品



第 6 回「支える建築」 2015.02.07

会場を名古屋都市センターに移し開催。
審査員も、中村好文氏、栗生明氏、古谷誠章氏、伊
礼智氏、江尻憲泰氏の 5 名となり、建築コンクール
は第2期とも言える新しい局面に入っていくことにな
る。
81 作品



第 7 回「間の建築」 2016.01.31

会場は名古屋都市センター。
審査員は、中村好文氏、栗生明氏、古谷誠章氏、伊
礼智氏、江尻憲泰氏の 5 名。
当日の集客が大きく落ち込み、開催告知方法等を再
検討することになった。
71 作品 67 作品



第 8 回「時間の建築」 2017.01.29

会場は名古屋都市センター。
審査員は、中村好文氏、栗生明氏、古谷誠章氏、伊
礼智氏、江尻憲泰氏の 5 名。
「シンポジウム」と「公開審査会」を同時に開催とす
ることに。
前半「シンポジウム」、後半「公開審査会」という2部
構成となる。
建築コンクールは第 3 期に突入。82 作品



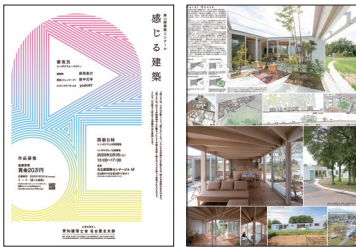
第 9 回「つくろう建築」 2017.11.05

会場は名古屋都市センター。
審査員は、中村好文氏、栗生明氏、古谷誠章氏、伊
礼智氏、江尻憲泰氏の 5 名。
作ろう 造ろう 繕う をかけたテーマであったが、
応募者にとっては少し難解であったか、作品数は少な
め。しかしながらコンペとしての作品の質は上がった
ように感じた。
54 作品



第 10 回「醸しだす建築」 2018.11.17

会場は名古屋都市センター。
審査員は、中村好文氏、栗生明氏、古谷誠章氏、伊
礼智氏、江尻憲泰氏の 5 名。
節目の第 10 回をむかえ、シンポジウムと公開審査会
は充実感のある内容であった。
ある一定の到達点に達したと感じた。
49 作品



第 11 回「感じる建築」 2020.02.01

会場は名古屋国際センタービル。
審査員は、前田圭介氏、田中元子氏、yoshi47 氏の
3 名。
審査員に建築家以外の 2 名をむかえ、新たな展開を
試みる。
建築コンクール第 4 期。
100 作品



会場はギャラリー moku(YouTube 配信のみでの開催)
審査員は、前田圭介氏、田中元子氏、岩瀬貴己氏の
3 名。
コロナウィルスが猛威をふるい、YouTube 配信のみで
の開催となった。
コンクールスタッフだけで前配信をしたことで情報
発信の新たな可能性を感じた。81 作品



第 13 回「さまよう建築」 2022.02.05

会場はギャラリー moku(YouTube 配信のみでの開催)
審査員は、前田圭介氏、ナガオカケンメイ氏、河野
桃子氏の 3 名。
前年に引き続きコロナウィルスが人々に影響を及ぼす
中、YouTube 配信による開催を継続。
配信も 2 回目となり機材も充実し応募者とリアルタイ
ムで Online のやり取りも行い受賞作が決定した。
80 作品



第 14 回「つぐ建築」 2023.02.04

会場はスペース七番 (YouTube 配信も併せて行う)
審査員は、松山将勝氏、ナガオカケンメイ氏、栗生は
るか氏の 3 名。
3 年ぶりに会場に観客 (40 名) を招待しての開催と
なり、議論も白熱しアフターコロナへの期待を感じる
開催となった。
過去最高の 150 作品



第 15 回「さよなら建築」 2023.10.21 開催予定

会場は東桜会館 (YouTube 配信も併せて行う)。
審査員は、松山将勝氏、ナガオカケンメイ氏、秋吉浩気氏の 3 名。
愛知県で開催される「JIA 建築家大会 2023 東海 in 常滑」の
建築家大会ウィークの参加企画として承認され、初の JIA との
コラボとなる。センセーショナルなタイトルと前回開催から短期
間での開催となる。

建築コンクールは 2010 年から毎回テーマを変えながら
“建築の定義を広げる”を目的として開催してきました。
受賞作品の選考にあたっては、審査に先立って開催される
シンポジウムにてテーマを掘り下げ、その後に公開審査会
で各賞を決定します。
これからも、実現した建築、実現可能な提案、家具や
プロダクト、インスタレーション、日常の風景など、分野の
境界を超える作品を募集していきます。

公益社団法人

愛知建築士会 名古屋北支部

私たちは文化を身につけます

人から、街から、生活から

それは磨き上げられ次の世代に伝わり

時代の流れや環境の変化に忘れ去られ

発見され再興し、また新興するものもあります

あなたが引き継いできたものは何ですか？

そして次の世代へ引き継ぐことは何ですか？

つぐ建築を募集します

後援

愛知県、名古屋市、(株)中日新聞社、(株)中部経済新聞社、(公社)愛知建築士会、(公社)日本建築士会連合会、
(公社)愛知県建築士事務所協会、(公社)日本建築家協会東海支部愛知地域会

協賛企業

AsahiKASEI
旭化成建材

あなたの「夢」応援します。
日建学院

 雨の michi をデザインする
Tanita Housing Ware

 株式会社
ユニゾン

 葉っぱの世紀のはじまり。
ユダホーム株式会社

 株式会社
確認サービス

 KY.
TILE

 誠和建設株式会社
SEIWA

 株式会社
加藤設計

 HC.Home's

kitchenhouse

製作・発行

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部
第14回建築コンクール「つぐ建築」2023年 10月発行

<https://www.asa758kita.jp/>
<https://kenchiku-concours-758n.org/>

第14回建築コンクール「つぐ建築」冊子編集委員／秋好大樹・久志本哲児・鴻池慎二・下村明子・長尾正誠・中峰宏恵
撮影協力／ToLoLo studio デザイン・編集／souvenir



【しぶちゃん】



【コンクールHP】